

今回の参戦について

NSF250Rを用いて鈴鹿サーキット国際レーシングコースでトレーニングを重ねているSRS-Motoアドバンス。

実戦については鈴鹿サンデーロードレースへの参戦を重ねてきているが、さらなる経験を積むことでライダーの現状のレベルの把握と今後に対する明確な課題を持てるよう全日本ロードレース選手権への参戦を企画した。

基本的に全日本ロードレース選手権には、国際ライセンスを持たなければ参戦できないが、J-GP3特別参加枠として国内ライセンスホルダーの参加が認められている。そのため、SRSアドバンス生であり、国内ライセンスホルダーである中島陽向(16歳)、細谷翼(15歳)、濱田寛太(14歳)の三人を最終戦のMFJ-GPへ参戦させた。普段走り慣れているコースだけに、国内最高峰クラスを戦うライダーと現状でどれくらいの違いがあるのか、経験するには絶好の場と言える。

11月1日~2日<フリー走行>

通常的全日本選手権と異なり、最終戦では事前テストが開催されないことから、木曜日にも特別走行が設けられている。

中島、細谷の二人は木曜日1本目の走行からスタートしたが、濱田は木曜日の走行はキャンセルし、一日遅れで金曜日からチームに合流することとなった。

中島は木曜日1本目の30分のセッションで12ラップし、11周目に2'26.645を出し全体の24番手でスタート。

細谷も12ラップし、10周目に2'26.087のタイムをマークして全体の20番手に付けた。

2本目のセッションでは中島が13ラップし、12周目に2'24.979をマークして21番手、細谷は12周し、9周目に2'24.494をマークして20番手に付けた。

この結果、初日は細谷が20番手、中島は21番手で終えることとなった。

初日の走行を終え、岡田監督はタイムが安定しない点を二人に指摘。

翌日の走行は例えペースが遅くても単独走行しながらラップ的に安定させて走行するようにし、そこから少しでもコースを攻めてタイムを詰めていくようアドバイスした。

金曜日にも前日同様晴天に恵まれ、絶好のコンディションとなった。

1本目を中島は13周し、6周目に2'22.823を出して18番手となった。

細谷も13周し、6周目に2'23.438のタイムで中島に続く19番手に付ける。

ウイーク初走行となった濱田は12周し、10周目に2'24.548のタイムで細谷に続く20番手となった。

2本目は細谷が13周し、12周目に2'22.936のタイムで14番手となり、中島が13周して11周目に2'23.488のタイムを出し17番手。

濱田も13周し、3周目に2'25.100のタイムを記録して23番手となった。

この結果、中島が総合18番手となり、これに細谷が19番手で続き、さらに濱田が23番手となった。



ThreeBond

11月3日<予選>

岡田監督により、予選、決勝で使用できる新品タイヤは1セットと各ライダーに指示された。

新品タイヤを予選で使い、決勝もそのタイヤで行くのか、予選は中古タイヤで走り、決勝を新品タイヤで行くのか、判断を各ライダーに求めた。

その問いかけに三人とも予選で新品タイヤを使うことを決断。

新品タイヤを装着し、三人とも予選に臨むことになった。

ドライコンディションの中で行われた予選は、中島が2'21.812で18番手、細谷が2'22.071で19番手、濱田が2'23.757で22番手となった。



11月4日<決勝>

ここまで安定したドライコンディションでスケジュールを消化してきたが、決勝日は早朝からあいにくの雨模様となってしまった。

とは言え、ここ鈴鹿をホームコースとしているSRSアドバンス生のライダーたちにとってその対応は難しいものではない。

朝のウォームアップ走行でレインコンディションへの対応を確認し、細谷が17番手、濱田19番手、中島24番手となった。

決勝も雨は止まず、三人ともレインタイヤを装着してスターティンググリッドに並んだ。ウエット宣言が出されたことから、当初は12周で予定されていた決勝周回数から2周減算され、10週のレースとされた。

いよいよレースがスタート。細谷がうまくスタートで飛び出し、オープニングラップを13位でクリア。これに濱田16位、中島17位と続く。

集団の中で積極的に攻める細谷は6周目に12位まで順位を上げ、さらにラスト2ラップで11位へポジションアップ。

そのまま11位でチェッカーとなった。濱田も安定して走行し16位で、中島は19位で、それぞれ完走した。



まとめ

全員、憧れの場所である全日本ロードレースという舞台に立つことができたわけですが残念ながらその雰囲気にも飲まれてしまい、持っている実力を出し切れずに終わってしまいました。

その部分ではまだまだ学ぶべきことが多いという現状ではありますが、コメントを見ても、その部分への問題意識は高く、改善していく気持ちも強いので、12月に行われる鈴鹿サンデーレース最終戦での彼らの走り期待したいところです。

レースをタイム的に見ると、チームの中で最上位となった細谷は2周目に2'39.774のタイムでしたが、7周目には2'34.014をマーク。その後は安定して34秒台でラップし、最終ラップにはこのレースでの自己ベストとなる2'33.590を出しています。

これは7位となったライダーのタイムを上回るものであり、序盤からこのタイムを出すことができれば、結果はさらに大きく変わっていたはず。厳しい結果ではありましたが、潜在能力の高さを垣間見せてくれるレースにもなりました。

引き続き、彼らがさらなる成長を果たせるよう、サポートしていきたいと思えます。

たくさんの応援をいただき、ありがとうございました。



ThreeBond

J-GP3クラス参戦 中島陽向(なかじま ひなた)

最初の走り出しが悪く、そこがすべてだと感じました。最初にうまく流れを作れば、もっと違った展開になったと思いますし、それは岡田監督や菊池先生にも言われていたのですが、その時点では重要性をそこまで感じる事ができませんでした。今回の参戦を聞かされたときは、もっとできると自信がありましたし、そのために練習もして準備を進めてきたのですが、実際にレースウィークに入ったら、いつも憧れとして見ていたライダーがたくさんいて、その雰囲気にも飲まれてしまいました。僕は鈴鹿サーキットの東区間が得意なので、前を走る全日本ライダーをそこで抜ける自信はあったのですが、どうしても攻めて行くような気持ちになれませんでした。走り出しの重要性が分かったので、この悔しさは12月のNGK杯で晴らしたいと思います。


J-GP3クラス参戦 細谷翼(ほそや つばさ)

初日から走りが全然ダメで、タイムがまったく出ませんでした。2日目になって少し良くなって単独走行でもタイムを詰めていくことはできたのですが、焦りからのか、コーナーではなかなかインに付くことができず、うまく自分の走りができませんでした。決勝は雨になってタイムはある程度出たのですが、ペースを上げるのが遅くて前と離されてしまったので、そこはもったいないと感じました。最初からうまくタイムを上げられればもっと順位を上げられたのに、それができませんでした。攻めて行こうという気持ちになれたのが、雨の決勝でタイムを上げられた理由だと思います。その気持ちが初日から出せれば、もっと違ったレースになったと思うので、今後は最初からタイム出しをしていくことを意識して走りたいと思います。


J-GP3クラス参戦 濱田寛太(はまだかんと)

今回のレースは金曜日からの参加になりましたがスタートダッシュができず、どのセッションでもリザルトの下の方になってしまいました。レースウィークを通してタイムの上げ幅が少なく、最終的にレース結果でも下の順位になってしまったというのはとても悔しいです。一つ一つのコーナーの攻略ポイントを考えることが足りなくて、それはひとえに、自分の考えが足りないと言うことだと思います。今回の参戦が決まったことを聞かされて、その時点ではトップをねらっていこうと自信もあったのですが、実際にレースウィーク入りしたら雰囲気にも飲まれてしまって、力を出し切れませんでした。


チーム監督(代表) 岡田忠之(おかだ ただゆき)

10周という短いレースに対して、初日からの各セッションへの取り組み方に問題がありました。そこはレースウィーク中、何度も指摘したのですが、なかなか改善が見られなかったのは残念です。そこで準備ができていなければ、レースで結果を残すことはできません。彼らはまだ成長途中で、今回の参戦も彼らに経験を積ませることが第一ですので、このレースで得た経験をぜひ今後の彼らの戦いの中で役立ててくれればと期待しています。できなかったことはどう理由からなのか、しっかりと自己分析をし、レポートに書いて提出するように言っておりますので、まずはそれを待ちたいと思います。



ThreeBond